

# 「恩師列伝」の試み

## 利根川 裕

音楽家の大バッハには、その息子エマヌエルエルの記した『死者略伝』という書物が残されている。大バッハ自身、バッハ一族の年代記を執筆していて、それをエマヌエルが補筆完成したものである。

なにしろ、バッハ一族は二百年にわたって五十人もの音楽家を生んだのだから、一族の略伝を記そうという企ては無理からぬことであろう。

「ヨハン・セバスティアン・バッハの属する一族には、音楽への愛と才能が、その一族すべての人たちに對するいわば共通の贈物として、自然から授けられているもののようにある」

と記してあるのを読んでも、あの大バッハとなれば、肉身の情緒的誇張などを越え

た客観的眞実が裏打ちされたものと読みとれる。

私にしても、ときにわが一族の肉親物語を書いてみたい気がないでもないが、とくべつ神の恩寵を授けたほどの先祖や縁者もないのだから、要するに個人的な自慰の企てにすぎなくなるのは当然で、とても本気にかけるわけのものでもない。

そのかわり、といつては申しわけないが、ここ数年來、私の頭に去來しているのは「恩師列伝」を書いてみたらどうか、という着想である。

私は田舎者だから、幼稚園なんて気のきいたところへは入らなかつた。だから最初の恩師は、小学校一年生の担任の先生である。そのかたが、私の生涯での最初の「先

生」である。むろんそこから筆をおろすことになる。

小さな田舎町では、先生のプライベートはすべて筒抜けで、昨夜はどこで何升の酒をのんで河へ転げ落ちたなどという話題も、たちどころに学童の耳にまで入る。だ**い**ぶ後になつて知つたのだが、この先生は歌人でもあり、その歌集から任意に抜き書きすると、次のような数首がある。

○低能児信二の家は浜添おちなひに軒を低めて建ちてあるなり

○魚の腹洗うぶう手やめて迎へたるおちな媼よく見ればうぶ眇目なり

○この媼おちなの呂律ろりつまわらぬもの言ひはまことし信二に似たるなりけり

○吾子わがこかこつ媼の言葉かなしかり何をか吾は言ふを得むかも

こういう歌をいま読みかえしていると、大酒に託していたこの先生の心の微妙な動きが手にとるように見えてきて、懐旧の情などというものの以上の切羽つまつた感慨が私の胸をふさぐ。

それはともあれ、恩師の数をさつと指折

つても、小学校時代には四人の担任の先生、中学校で十五、六人、高校でも十五、六人。大学では、ときおり盗聴にいった他学部の先生まで含めると、ほぼ二十人。これでおおよそ五十余人となる。

むろん私は、近代国家の公共的教育機関で学んできたのだから、たとえば松下村塾の塾生が、吉田松陰という教育的個性の信者であったとおなじ意味での恩師をもっていない。あるいはまた、私は福沢諭吉や大隈重信の建学精神にもとづく種類の教育機関と無縁な人間だったから、いわば当てがい扶持の恩師に偶然出会ってきたのだともいえる。

とはいえ、その間にこちらが信者となつた恩師は何人かいらっしやる。出会いが偶然だからといって人間的感応の真率さに不足のないことは、この世のあらゆる恋愛感情と一般である。

もっとも、私はこの種の恋愛感情が私のなかで偽りであったとはさらさら思わないが、恋愛感情の衰弱という現代的風潮から免れていないことも事実である。

かつて親鸞は、たとえ師の法然にだまされて地獄へおちても後悔しない、とまで言いきったが、これだけの師弟的殉教は、残念ながら私の資質を越えたものである。

ところで私の「恩師列伝」。恩師を比較論評しようなどいう不遜な企てではない。五十余人の恩師が、いったい私という人間のどの部分を、どの程度に形成してくれたかを正確に言いつては出てくることは出来っこないが、この五十余人のかたがた以外の先生と出会わなかつた以上、この五十余人の恩師はいつてみれば私の運命となつて私に内在していることは確かなことである。

そういう意味で、この「恩師列伝」は、私の自叙伝の一つの試みである。——いま私は、うっかり自叙伝などと記したが、私は自分に対して「この人を見よ」といふほど浪漫的な顕示欲をもつてはいないから、△自叙伝はいかにも不用意ないいかたとなる。——ただ自分というものの輪廓を、少しでも客観化して自分に納得させてみた要求はかなり強くあつて、「恩師列伝」はそういう作業にとつて不可欠なものであ

ると思われる。恩師という鏡に自分を写してみたいのである。

そして、もう少し広げていえば、私の学生生活期が戦中から戦後にまたがって、当然そこには教育観の大転換もあつたわけだ。「恩師列伝」はかくて、そういう歴史の変遷の忠実な反映となるであろうということも、私の目論見になかに入っていないことはない。

ともあれ、「恩師列伝」によつて、かつて私が経過してきた姿を、自分自身のために再現してみたい衝動はじゅうぶん働いて、それが年来ますます募つてきているのである。たぶんこのことは、私がすでに、あまり若くなくなつたという証拠である。というのは、つまり自分の少年期や青年期に対して、いまはもう、なまなまし嫌悪や羞恥を持たなくてもすむだけの歳の月の距離が生れたということなのだから。その意味では、この試みは、すでに私のなかで死にかけた自分を描いてみることであつて、自分が自分に書く一種の「死者略伝」だともいえよう。